



国民教育の

渡部昇一

国民の教育

渡部昇一

国民の教育

平成十三年十一月十日 初版第1刷発行

渡部昇一（わたなべしやういち）

一九三〇年山形県生まれ。上智大学大学院修士課程終了。
独ミンスター大学、英オックスフォード大学留学。
フルブライト招聘教授としてアメリカの六つの大学で講義。

九四年、ミンスター大学より名誉博士号を授与。
現在、上智大学文学部名誉教授。第一回正論大賞受賞。

著書に
『知的生活の方法』（講談社）、
『ドイツ参謀本部』（中央公論社）、
『日本史から見た日本人 古代編／鎌倉編／昭和編』（祥伝社）、
『腐敗の時代』（PHP研究所／日本エッセイストクラブ賞）、
『かくて昭和史は甦る』（クレスト社）
『自分の壁を破る人・破れない人』（三笠書房）、
共著に
『こんな「歴史」に誰がした』『賢者は歴史に学ぶ』（クレスト社）、
『日本の驕慢 韓国の傲慢』（徳間書店）、
『封印の近現代史』（ビジネス社）等がある。

著者……………渡部昇一

発行者……………小原常雄

発行……………(株)産経新聞ニュースサービス

発売……………(株)扶桑社

東京都港区海岸1-15-1

(〒105-8070)

電話 03(54003)8871(編集)

03(54003)8859(販売)

<http://www.fusho.co.jp>

印刷製本……………大日本印刷(株)

©2001 Shouchi Wanabe

ISBN4-594-03301-6 Printed in Japan

定価はカバーに表示しております。

落丁・乱丁は扶桑社販売部宛にお送り下さい。

送料は小社負担にてお取り替えます。

国民の教育 目次

はじめに

3

1 … 塾を認知し、学校崩壊を救え

12

2 … いろいろな学校があつていいじゃないか

60

3 … 家庭教育は危機に瀕している

78

4 … 金属バット事件の父親とは何だったのか

92

5 … 厳父こそが子どもを育てる

110

6 … 国旗と国歌への敬意は義務教育で

124

7 … 学力低下と高等教育の危機

134

8 … 私は逆説的に「ゆとり教育」に賛成である 158

9 … 出世コースがパターン化して日本が傾きだした 178

10 … 横入りという複線があるから多様な人材が生まれる 200

11 … エリート教育、ステップアウトのすすめ 236

12 … 教科書と教科書検定の核心 248

13 … 日教組教育の大罪 286

14 … 英語力は発信力を身につけること 300

15 … こういう国語教育を受けたかった 318

16 … 古事記、日本書紀から話を始めるべきだ

332

17 … 教育における「平等主義」は無意味だ

354

18 … 皇室を正しく理解できるプライドを

374

19 … 昭和史を知らない子どもたち

390

20 … 日本と日本人を教えない「教育」

440

21 … 読書が好きな人、嫌いな人

464

22 … 私の古典は誰がなんと言おうと『半七捕物帳』

488

23 … 蔵書と知的生産の関係

504

24 …六十歳からでも肉体と脳は鍛えられる

548

※21～24は、渡部昇一氏の過去の著作から編集部が選んで収めたものです。

あとがき

561

ブックデザイン 清水良洋 佐の佳子
表紙カバー写真 アフロフォトエージェンシー

国民の教育

はじめに

日本の教育は戦後ずっと日本という国と、日本人という民族を解体させることに努力してきたのではないか、という思いが、このごろますます強くなってくるのを押さえることができない。つまり「日本に悪しかれ」という願いを持った勢力が、日本の教育を動かしてきたのではないか。

一例を挙げてみよう。昭和二十年の敗戦は日本がかつて経験したことのない大事件であり、国民はただただ呆然とした。日本の大都市六十ぐらいは焼き払われ、原爆まで使われた。陸軍は戦死約百五十万人、海軍は世界無敵を誇った連合艦隊も、航空部隊もあらかた海底に沈み、それと共に数十万の将兵が運命を共にした。また数十万人の市民も空襲によって殺された。大陸には帰国できない軍人や一般人が百万人以上もいた。日本はどんなに混乱しても不思議はなかった。

ところが大きな混乱はなかったのである。大都市でコリア人が暴れたり、闇市場での喧嘩はあったかも知れないが、国全体としては整然としていた。

こうした終戦直後のころ、ベストセラー『気違い部落周遊紀行』を書いたきだみの氏がコリア人の青

年に出会った。彼はその青年に言った。

「これからは君たちの時代だね」と。

そうしたら、意外にもその青年はだいたいの次のように答えた。

「いや違います。私は以前は日本人が嫌いでした。しかし今この敗戦という大変な事態なのに、日常の生活は変わらない秩序を保って行われています。私の国ならこんな具合にはいきません。私はこれから本当に日本人から学ばなければならぬと思っています」

この青年の言ったことは事実と言ってよいであろう。私の住んでいたところは東北の田舎町だから、とくにそうだったのかもしれないが、敗戦の前も後も生活は同じであった。しいて言えば、旧制中学に登校するときに、ゲートルを巻く必要がなくなったぐらいのものであった。

その敗戦から間もないころに、天皇陛下（昭和天皇）は全国をおまわりになって国民に親しく接しようとなされた。警備はなきに等しかった。私も川の土手の上で、川から上がったままの半裸姿で、偶然にも天皇陛下のお車を迎えることになった。一緒に泳いでいた連中も一緒に並んだ。天皇の車を護衛する警察のオートバイも何もなかったから、天皇と私たちの距離は二メートルもなかったであろう。何しろ狭い土手の上なのだ。私はその天皇の車に触ることもできた。

このような無防備のまま、昭和天皇は工場なども訪問されて「民衆」に囲まれたのである。ある労働者が握手を求めたら、「日本式にお辞儀にしましょう」と答えられたという話もあった。実際日本中で握手してまわられたら、天皇の手はこわれたかもしれない。

このことを思うと、今更ながら私は驚かざるをえないのだ。天皇を暗殺しようと思えば、ピストルも日

本刀もいらず、台所にある出刃包丁で簡単にできたであろう。しかしそんなことをする人は誰もいなかった。昭和天皇もそんなことを心配されなかったし、警察もそんな心配をしなかったのである。戦場でひどいめにあった帰還兵、夫を失った未亡人、息子を失った親、父を失った子どもなど、無数にいたのだ。

しかし昭和天皇を恨んで危害を加えようという日本人は一人もいなかったのである。日本人にとっては、この前の戦争が昭和天皇に責任があるという発想はなかったから、昭和天皇の全国御慰問はひたすら歓迎されたのである。これに驚いたのは、むしろ外国の新聞であった。敗戦国の元首が「民衆」から熱烈歓迎されるを見て、イギリスの新聞などは明らかに日本人を見直している感じさえあった。

それが半世紀もたつたたため間にいかに変わったか。昭和天皇が崩御され、多摩御陵に移されるとき、警戒体制を思い出してみたい。沿道すべて警官であり、それにもかかわらず爆弾で妨害しようという者が出た。

この極端な変化はどうして起ったか。すべて戦後の教育のせいである。

本書では日本の教育の根底にかかわる問題と、それに対応する私見を率直に述べたものである。そして現在の日本の教育問題の根っこの部分に注目していただければ幸いである。

渡部昇一

〔付記〕

本文の中で、「シナ」と「中国」は区別して用いた。中国は中華人民共和国や中華民国の略称としてのみ正当と言うべきであり、地理的、文化的概念として用いることはできない。地理的概念、あるいは古代以来の文化的概念を指す場合は、「シナ」（英語のチャイナ）を用いることが現実的呼称であると考ええる。中国という言葉の背景には、外国を夷狄戎蛮いであしやうばんと見なし、周囲の諸民族を獣類か虫類視して自らを高いものとする外国蔑視がある。またコリアという用語は、現在の北朝鮮、大韓民国の双方を含んで呼ぶ場合や、朝鮮半島を地理的概念として呼ぶ場合に用いている。

国民の教育 目次

はじめに

3

1 … 塾を認知し、学校崩壊を救え

12

2 … いろいろな学校があつていいじゃないか

60

3 … 家庭教育は危機に瀕している

78

4 … 金属バット事件の父親とは何だったのか

92

5 … 厳父こそが子どもを育てる

110

6 … 国旗と国歌への敬意は義務教育で

124

7 … 学力低下と高等教育の危機

134

8	私は逆説的に「ゆとり教育」に賛成である	158
9	出世コースがパターン化して日本が傾きだした	178
10	横入りという複線があるから多様な人材が生まれる	200
11	エリート教育、ステップアウトのすすめ	236
12	教科書と教科書検定の核心	248
13	日教組教育の大罪	286
14	英語力は発信力を身につけること	300
15	こういう国語教育を受けたかった	318